

SONRISA

そんりさ

Vol.135



あるコロンビア難民の死

コロンビアに暮らすルイスさんの家族。彼らも故郷を追われ避難民として厳しい生活を送る。(右から・父親フベナルさん・母親ラウラさん・兄ヒルベルトさん) 2012年12月コロンビア・ナリーニョ県(柴田大輔撮影)

「そんりさ」はスペイン語で「微笑み」を意味します。私たちレコムは様々な活動を通じてラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

- 02 故郷を求めて あるコロンビア難民の死 ……柴田大輔
- 06 ボリビアだより「2011年の政治・社会を振り返る」 ……藤田 護
- 09 エルサルバドル麻薬問題 ……翻訳ワークショップ
- 11 ケチュア語詩集「アイランプ」より ……栗原茂太
- 12 ラ米百景「カサ・デ・ラス・アメリカス」 ……伊高浩昭
- 15 音楽三昧♪ペルーな日々(第16回) ……水口良樹
- 17 メキシコ食巡り「ひき肉のトスターダ」 ……ミゲル・アクーニャ
- 18 ニュースクリップ ……サザエ

故郷を求めて あるコロンビア難民の死

柴田 大輔

コロンビア南西部のナリーニョ県に、深い山々に囲まれたアルタケルという町がある。熱帯の木々が山肌を覆う。町の墓地に一人の友人が眠っている。四六歳で最期を迎えたルイス・フェリペ・タピアさん。九年間、エクアドルで難民として暮らしてきたコロンビア人だ。

コロンビアでは四〇年以上内戦が続いている。近年では麻薬を資金源とする左翼ゲリラと右派民兵組織、政府軍の間に農村が巻き込まれ、三〇〇万人以上の国内避難民、五〇万ともいわれる難民を出している。ナリーニョは現在、最も暴力の激しい地域のひとつであり、エクアドルへ難民化する人々が後を絶たない。

昨年一月中旬、私は彼の母親ラウラさん、兄のヒルベルトさんに案内され、アルタケルの墓地へ向かった。灰色の雲が空を覆う、肌寒い午後だった。前夜の雨にぬかるむ道を、二人の後ろについて歩く。

入り口の古い門をくぐり、奥へと進む。やがて、彼の名が刻まれた墓碑の前で立ち止まった。棺が納められたコンクリート製の墓はレンガによって封がされている。一人ずつノックする。

「オーラ（やあ）」。そう声かけるように。周囲の雑草を丁寧にもしる、年老いた母親の横顔を見ていた。摘んできた花と、彼が好きだったコロンビアのビール「ポケル」を添えた。ルイスさん、コロンビアに帰ってきたんだね。



ルイス・フェリペ・タピアさん。この1月後、彼は突然仲間の元を去った。2011年7月エクアドル・リタ市

九月初め、彼の息子で同名のルイスから日本にいた私にメールが届いた。「ダイスケ、元気でやってるか？こっちはよくないことが起きたんだ。父が殺されてしまった。みんな悲しんでいる」

文面はあまりに短く、その内容に戸惑った。私は何度も読み返した。もし事件だったらと思いい、ネットでエクアドルのニュースを検索した。現地新聞に、彼の死を知らせる記事が載っていた。八月二一日、彼が暮らしていたエクアドル北部の町リタで、祭りの最中、何者かに銃で撃たれ亡くなった。犯人は捕まっておらず、原因は分かっていないとある。

本当に死んでしまったんだ。その事実実感に伴わない。すぐに悲しみは湧かなかった。

出合い 2007

ルイスさんは、リタとその周辺に暮らす難民グループのリーダーだった。リタはコロンビア国境に近い山間の小さな町だ。ここに彼と同郷から移り住んだ難民が暮らしている。多くが先住民族アワの人たちだ。彼自身はパスト民族だが、アワ民族のコミュニティーで生まれ育った。共通する土地の記憶が彼らを結び付けていた。

私は二〇〇七年一二月、現地で活動する教会組織の紹介で初めてルイスさんと出会った。以来、彼らの生活を知りたくて毎年訪ねていた。彼は当時、リタから車で五時間余りの首都近郊の町に家族と暮らし、仕事の合間にリタへ通っていた。

彼と私は不思議と気が合った。もしかすると私が一方的に感じていただけかもしれないが、人間臭さが溢れる彼が好きだった。彼を通じて沢山の人たちと知り合った。一人ひとりが個性的で、真剣に生きながらもどこか温かい可笑しさを持つていた。何度でも会いたくなる人たちだ。

角刈りで真っ赤なシャツを着ていたルイスさんは、小柄だが、がっしりした体格をしていた。握手の途中でギュッと力を込めるのが印象に残っている。話を聞きたいという私に快く応じてくれた。

故郷を離れた人々は、全てを手放しここに来た。長い人で一〇年近く経つ。その多くが日雇いの仕事に従事し、未だ生活基盤を築けずにいた。ルイスさんが夢を語った。

「自分たちの組織を作りたいんだ。そこで収益を得て、各家庭に分配する。ゆくゆくは大きな土地を買い、コロンビアで暮らしていたときのようにコミュニティを作りたい」

再訪 2009

二〇〇九年に訪ねると、彼は家族と離れリタに越してきていた。一人で暮らす寂しさを口にしたが、仲間の近くで生活しながら活動に力を入れようとしていた。

一〇日間、彼の家に泊まりながら、家々を訪ね歩いた。

家具職人である彼が自分で建てた家は、三畳ほどの小屋に、手製のベッドと本棚が置かれて



ルイスさんの墓を参る兄のヒルベルトさん。
2012年12月コロンビア・ナリーニョ県

いた。板を張り合わせただけの壁は、ところどころ隙間があいていた。それでも、暖かいこの地域では気にならなかつた。彼は昼間、屋外の作業場で家具を作る。家に水道はなく、トイレ・シャワーは隣家に借りに行き、食事は近所の友人宅に世話になるか食堂で済ませる。部屋には寝に戻るだけだった。夜はアンテナのないテレビでDVDを見ながら寝てしまう。私も彼と同じ生活を送った。

私は彼のベッドの隣に寝袋を敷いて寝ていた。私はあまり喋る方ではなかったのだが、彼も家の中では口数が少なかった。自然、沈黙が長くなる。それでも不思議と気を使わずにいら

れた。お互いに、思いついたことをポツリポツリと口にする。どちらかが先に眠ると、もう一人がテレビを消した。

ある夜、彼がふと口にした。
「オレはずっと一人だったんだ。仕事も一人ですてきた。今は組織のリーダーをしているが、どうすればいいのかわからない」

また、こうも言っていた。
「若いころは白人になりたいと思って生きていた。一〇代で家族から離れ、町で働くようになった」

若くして家族から自立した彼は、家具職人をして各地を渡り歩いてきた。

彼から、先住民族の指導者だった父親であるフベナルさんの話をよく聞いた。「親父は組織の事をよく知っている」。そう話していた。

パスト民族のフベナルさんは、結婚後、コロンビアのアワ民族コミュニティ・マガイに移住した。山を切り開き、サトウキビやユカ芋などを栽培していた。

一九九〇年代に、現在の紛争の原因となるコカ栽培が地域に広がると、栽培の手軽さも手伝い、確実な収入源として多くの人が頼りだす。それでもフベナルさんはコカを「悪魔の作物」と呼び、決して手を出さなかつたという。

一九九六年には、リカウルテ市の一地区だったマガイを、先住民族領域（レスグアルド）として国に登録し初代首長を務めた。地域の先住民族組織設立にも尽力した。

敢えて自分たちを「先住民族の難民」と位置

づけたルイスさんは、父親と自分を重ね合わせ
ていたようだった。

二〇一〇年は六月から七月にかけて二週間に
滞りた。

その間、変わらぬ生活から何とか活路を見出
そうとする難民となった人たちの焦りが伝わっ
てきた。何度か収益を得るためのプロジェクト
を立ち上げては失敗を繰り返したという。その
ときルイスさんは「あと一年が勝負かな」とも
口にしていった。家族と離れて一年が経っていた。
活動に行き詰まりも感じていたようだ。「あと
一年したら、俺は旅に出る！ どこか知らない
ところへ行くぞー」。そう冗談めかして話して
いた。

帰国が迫りリタを去る私に彼は、部屋に飾っ
てあった木製のキリスト像を、大袈裟なくらい
ゴシゴシ服でふいて「もってけ」と渡した。そ
れが彼との最後になってしまった。

二〇一一年一二月にリタを訪ねると、私がリ
タを出た翌月、彼は突然リタを去っていったと
仲間の一人から聞いた。手持ちの資材を全て売
り払い、太平洋岸の町で金の採掘をしていたと
いう。家族の元へも、亡くなるまで一年近く戻
らなかつた。死の三ヶ月前にリタに戻ってきた
が、彼はグループと接触しようとはしなかつた。
昨年、奥さんのアンヘラにルイスさんの子ども
が生まれた。しかし、彼は一度も会おうとはし
なかつた。

祖国を去る日

昨年一二月、帰国までの数日間を、首都近郊
の町マチャチに暮らすルイスさんの家族と過ご
した。彼らは家具作りで生計を立てている。年
末までの注文が立て込み、家族総出で作業にあ
たっていた。

ある日の午後、買い物に行くアンヘラさんに
ついて行った。その帰り道、彼女は「彼（ルイ
スさん）、とつてもつらい体験をしたのよ。」
と言って、コロンビアを去る原因となった事件
を話してくれた。



兄弟3人で家具を作るルイスさんの息子たち。父から受け継い
だ技術で生活を送る。2012年12月エクアドル・マチャチ市

ルイスさんは各地を渡り歩いたあと、地元の
ナリーニョ県に帰ってきた。結婚をしてからは、
故郷に近いアルタケルで家具作りを始めた。周
囲の評判は良かったという。お客さんの中に、
町に暮らすゲリラがいた。ゲリラは普段、一般
人と変わらぬ生活を送っている。ある時から、
家具作りだけでなく、木製の銃床を依頼される
ようになった。積極的かどうかは分からないが、
彼はそれを作り続けた。これが彼の運命を変え
ることになった。

二〇〇二年のある日の朝五時、ゲリラに敵対
する右派民兵が、町の広場にトラックで乗りつ
けた。まだ誰も寝ていた。民兵は銃を撃ち鳴
らし、怒声をあげる。住民全員が広場へ集めら
れた。民兵たちは住民の名を書いた紙を手にし
ていた。それはゲリラに協力する人物のリスト
だった。そこにルイスさんの名前があった。集
められた中から五人が呼ばれ、そのままトラッ
クへと載せられた。

五人は後ろ手に縛られ、どこか遠くの山奥で
下された。拷問されたうえで、三人が殺され山
へ埋められた。連れ去られてから三日後、ルイ
スさんが家族の元へ帰ってきた。体中が痣だら
けだったという。

その日のうちにアンヘラさんの両親が暮らす
隣町へ三人の子どもを連れて逃げた。翌日には
約三〇〇^キ北のカリ市へ向かう。一週間後、家
族五人でエクアドルへと渡った。「何もかも手
放してきたの」。アンヘラさんが振り返る。

長男で二五歳になるマルティンに、「コロン

ピアを出た時のこと覚えてる？」と聞いたことがある。彼はしばらく間をおいてから、人差し指を頭にあて「あの日の事は、しっかりと憶えてる」。そう話すと、それ以上何も語らなかつた。

彼が残したもの

私はエクアドルに通い出して四年が経つ。その間、同じ人に何度も会っている。それぞれが、会うたびに変化を遂げている。

これは、ほんの一部ではあるが、私が触れることができた彼らの人生だ。この四年という歳月の後ろに、もっと沢山の時間の流れがある。話を聞くことでしか知ることができない、山のように積み重なった時間の上に、一人ひとりの今がある。それぞれの過去を知る度に、私は何も知らなかつたんだと感ずる。

ルイスさんの事もそうだ。私は彼の何を知っているのだろう。彼はリタを去る時、何を考えていたのか。私は彼から何も感ずられなかつた。

彼は若いころ、故郷に対する反発からか、自由を求めて家を出た。そこには強い好奇心もあつたのだろう。各地を転々としていた時期を経て、地元に戻り家庭を持った。その後、暴力が彼から「普通の暮らし」を奪つた。

ルイスさんは、酔うと何時もコロンビアの良さを自慢した。それでも「もう二度とコロンビアには戻らない」。そう話した。それは、帰りたいくても帰れない故郷への思いを振り払うための強い言葉だつたように今は思える。彼がリタ



亡くなったルイスさんの家族。家族が力を合わせて生きている。2012年12月エクアドル・マチャチ市

で目指したものは、家族や友人と過ごせる、心の休まる本当の居場所を作ることだつたのではないか。

ある晩、二男のルイスが部屋に置かれたテーブルの脚を指してこう言つた。
「オレはこれが作れるんだよ」

それは精巧に彫られた白鳥の形をしている。「彼がこれを教えてくれたんだ。」

ルイスは、どこかきこちなく父親を「彼」と呼んだ。そこには、家族を遠ざけたまま死んでしまつた父親に対する割り切れない感情が見て取れた。
「おれは君のお父さんが好きだつた」

私がそう話すと、彼は机の引き出しから沢山の写真を出した。それは父親の写真だ。集められるだけ集めたのだろう。若いころの証明写真もあつた。写真を見ながら、ルイスがひとり言うように話し出した。

「去年、コロンビアのおじいちゃん（フベナルさん）の所に家族で行つたんだ。彼が『親父はもう年だから、もしかするとこれが最後かもしれない』って言つて。それに、八月七日は俺の誕生日でリタに行こうと思つた。だけどお金が無くてさ。結局いけなかつた。そうしたらさ、すぐ彼、死んじゃつた」

「この白鳥、すごいだろ。俺はこれができるから、これからも生きていけるんだ……お父さんがオレに教えてくれたんだ。」

そう話すと、小さく咳をした。

ルイスはもうすぐ父親になろうとしていた。出産を二月に控え、お腹が大きく膨らむお嫁さんのリリアーナが、隣の部屋で静かに寝ていた。

ルイス・フェリペ・タバアさんは、難民となりエクアドルで暮らしながら戻れぬ故郷を思いつづけた。彼は仲間、家族を捨て、孤独の中で最後を迎えた。なぜだつたのか。彼が見ていた世界を、私は想像することしかできない。しかし、本人の意思とは別の所で、彼は息子たちに新しい故郷を築くための種を残した。その種はすでに芽吹きだしている。育つて欲しい。人々を温かく包みこんできた、故郷の森のように。

ボリビア便り (その9)

2011年ボリビアの政治・社会を振り返る

藤田 護 (注1)

最悪の一年間だと指摘される二〇一一年の幕開けを象徴的に表していたとも言えよう。

3. TIPNIS 国立公園を巡る紛争

政権の安定を危機に陥れるほどの大規模な抗議行動へとつながり、二〇一〇年二月三十一日には政府はこの措置を撤回することを余儀なくされた。

ガソリン価格への補助金自体の是非は、かつてから議論になってきた。今回も、この補助金が政府財政への大きな負担になっており、他の分野への支出を困難にしていること、隣国への密輸を産んでいること、富裕層にも貧困層にも同時に裨益してしまうことなどが、補助金撤廃の理由として挙げられた。

しかし同時に、人々の生活に混乱をもたらす措置を、事前の発表や協議もなしにクリスマス前の翌日に発表するという方法は、モラレス政権

エボ・モラレス政権の政権基盤を更に危うくすることになったのは、ベニ県のイシポロ・セクレ先住民領域・国立公園 (TIPNIS) を貫通する政府の道路建設計画に対する、同地の低地先住民による反対運動である。八月一五日に現地を出発したデモ行進は、反対派を利用しようとする政府の切り崩し工作に力を削がれることはなかった。九月二五日に警察がデモ隊に介入し、強制的な帰還を試みたことが裏目に出て、このデモ行進は再度結集しただけでなく、全国的な支持をも集めることになった。一〇月一九日にラパス市に到着したデモ行進は大群衆によって熱狂的に迎えられ、モラレス大統領は道路建設を禁止する法律を通すことを余儀なくされた。

における二大事件を構成していると言えよう。同時に、それはモラレス政権下で汚職がかえって増えているのではないかという懸念も含め、政権が目立った成果を上げていないことに対する、より広範な不満が増大しているのでもある。

2. 燃料価格の引き上げ (注2)

二〇一〇年二月二六日に政府が大統領令 (第748号) を通じて、ガソリン価格とディーゼル価格の値上げ (それぞれ七三%、八三%) を発表したことが、事の発端となった。これは、

も元の水準に戻ることはなかった。二〇〇九年一二月の総選挙で圧勝したことで、何でもできるという傲慢さがモラレス政権に生まれたこと、そしてそれが人々の裏をかく方法で一気に実施して逃げ切りを図ろうとする算段へとつながったとすれば、それはモラレス政権にとって

それだけではない。一〇月一六日にボリビアで初めて実施された司法府の高官を選出する選挙は、政治権力により司法府を掌握しようとする意図が露骨に表われていることで、当初から批判を浴びていたが、TIPNISを巡る反対運動が大きな支持を得る中で、無効票 (四一・五九%) が有効票 (四一・〇八%) を若干上回る事態となった (残り白票)。選出された司法府高官の着任自体に支障はないものの、その正当性は

大きく疑問に付されることとなった。当初モラレス大統領は七〇%以上の支持を目指すと言っており、二〇〇五年一二月の総選挙で勝利して以来、エボ・モラレスMAS政権の選挙における初の敗北となったと広く受け止められた。

この道路建設はブラジルからの融資を受けており、太平洋への出口（中国への輸送港）を重視するブラジル政府の意向が背後にあることも指摘されていたが、国内的に重要なのはコカ栽培農民のこの土地への進出が、木材業者の活動とあいまって、低地先住民の生息を脅かしているという、広い意味での高地先住民と低地先住民の間の勢力争いが社会的背景としてある。コカ栽培農民を最大の支持基盤とするエボ・モラレス大統領は、終始道路建設を推進する姿勢を崩すことがなかった。しかしこれは、環境運動の旗手として国際的に自らを位置づけようとしたモラレス大統領のイメージを大きく汚しただけでなく、この政権は本当に先住民の味方なのだろうかという以前から存在していた疑念を強める事ともなった。

4. 〇三年一〇月アジェンダの終焉？

モラレス大統領に対する支持率を見てみると、一〇月に三三%まで下落したモラレス大統領の支持率は二月時点でも三六%までしか回復していない（Ipsos Apoyo社の調査による）。このような二〇一一年を通じた政治状況は、

まずは政治的打算の次元で影響をもたらした。上で見たモラレス大統領に対する支持率は、モラレスの「一人勝ち」状況が終わりを告げており、「その次」を視野に入れた主要政治家の動きが活発化しつつあるのが現状である。

しかし、より広くは、ここまでボリビアの政治アジェンダとなっていた、二〇〇三年一〇月の抗議行動と政権交代に起因する「一〇月アジェンダ (agenda de octubre)」が終焉しつつあるのではないかとする見方が提示され始めている（注3）。エボ・モラレス大統領自身が、今年一〇月一二日の演説において、新憲法の制定と天然資源の国有化からなる一〇月アジェンダは完了していて、新アジェンダの制定に取り組む必要があると述べている（注4）。

またモラレス政権は、ガルシア・リネラ副大統領が革命的創造的な時期がここから始まるとする論考を発表したり、一二月には政権を支持する社会勢力を集めた「社会サミット (cumbre social)」を実施し、新たなアジェンダを設定しようとする試みを行ったりもしたが（これは今年一月現在取り組みが続いており、参加型民主主義の一つの取り組みとして注目できる側面は存在する）、対応が後手に回った印象を与えたことは否めないだろう。実際、この社会サミットには、反対勢力が招待されていないのもちろんのこと、ボリビア中央労連 (Central Obrera Boliviana, COB) や低地先住民勢力が不参加を表明している。

もうひとつ重要な点は、二〇一一年のボリビア政治も「先住民」を巡るものであったことである。初の先住民出身大統領と位置付けられたエボ・モラレス政権の誕生は、疑いようもなく重要な社会変革をボリビアにもたらしたが、コカ栽培農民を優遇し低地先住民を軽視する姿勢（高地先住民を重視する姿勢）が明らかになっただけでなく、TIPNIS紛争においてモラレス大統領は自らを既に先住民と位置付けず「農民 (campesino)」の呼称を用い続けていることがカルロス・メサ元大統領によつて指摘されるなど（同時期のツイッターにおける発言）、誰が先住民なのかというのは政治的に流動し続けているのであり、「環境」「生態」に加えて「先住民」という正当性をモラレス大統領側が失ったことが今回の政権の対応の失敗の根幹にあると、筆者は個人的に今回の事態を見ている。

これは二〇一二年に引き継がれることとなる。今年は一〇〇一年以来一一年ぶりの国勢調査が今度こそ実施されるかと目されており、ここでは民族意識を把握する質問の設計が再度大きな争点となるからだ。Página Siete紙は、一二月二九日に、ボリビア人は混血（メステイソ）と先住民を背反するアイデンティティとしては捉えていないとする重要な記事を掲載している（注5）。二〇〇一年の国勢調査では先住民の民族名が列挙されて、それ以外には「その他」の項目のみが設定され、混血アイデンティティに関する質問は存在しなかった。現在でも、

混血の進展を根拠に先住民アイデンティティの「真正さ」を否定しようとする政治的動きが根強く存在する状況で、二〇〇一年におけるこの判断には肯定できる面があると筆者は個人的に思っているが、混血アイデンティティの再定義が同時並行して進んでいる重要なテーマであることは疑いようがなく、また先住民とは何かという問題が引き続き議論され続けることは間違いないように見受けられる。
(おわり)

(注1) ボリビア・カトリカ大学客員研究員。
なお、本稿の執筆に当たっては、日刊紙では主に La Razón 紙と Página Siete 紙を、また月に二回発売される Nueva Crónica 紙 (Plural 社) を参照した。

(注2) ガソリナツソについては、在ボリビア日本大使館の専門調査員である岡田勇さんの『『ガソリナツソ』以降のボリビアの政治・経済情勢』『ラテンアメリカ時報』2011年秋号も参照。特に、エボ・モラレス政権下でも社会運動が政府に対する拒否権を行使する勢力であることが確認されたとする洞察は重要。

(注3) 「10月アジェンダの成立」に関しては、筆者自身の以前の原稿も参照。藤田護「二〇〇三年十月政変から改憲議会へーボリビア政治情勢への視点」藤岡美恵子、中野健志編『グローバル化に抵抗するラテンアメリカの先住民民族』現代企画室、2005年。

(注4) http://www.radiofides.com/noticia/politica/Evo_agenda_de_octubre_fue_cumplida_es_hora_de_debatir_una_nueva_plataforma

(注5) <http://www.paginasiete.bo/2011-12-29/Nacional/>

Destacados/3Nac00129122011.aspx

なお、この論点に関しては、筆者自身もかつて検討したことがある。柳原透、清水達也、藤田護『アンデス高地先住民への協力』JICA 客員研究報告書、2009年において、筆者が執筆した第一章を参照。

エルサルバドル――

「麻薬問題にはもつと有効な政策を」

マルコ・アントニオ・マルティネス・ガルシア

2011年10月29日

中米の近隣諸国同様、エルサルバドルもまた麻薬密輸の問題を抱えている。麻薬カルテルは密輸のために地元の犯罪グループと手を組んでおり、警察もまた、近隣諸国と同じく、かなり

のレベルでそれにかかわっている。軍は麻薬取り締まりに協力しているが、街頭での警備に当たるといふ事態は憲法上の規定に違反することになるため、一時的なものにならざるをえない。

――これがエルサルバドルの公安検察省副長官、アルバロ・ヘンリー・カン波斯・ソロルサノが語る今後の見通しである。

麻薬政策に関する第三回ラテンアメリカ会議及び第一回メキシコ会議に参加するため、メキシコに滞在中の同長官はインタビュウに答え、エルサルバドルにおける禁止薬物の使用が増加していること、依存者の治療に当たる施設が不足していることについても語った。

麻薬問題が市民の暮らしを脅かす

エルサルバドルは今年、アメリカ合衆国が作成した麻薬の生産や密輸にかかわる国のリストに加えられた。地理的にエルサルバドルは、グアテマラとホンジュラスとともに中米の「北の三角地帯」をなしている。この三角地帯では、「マラス」のような地元中米のギャング団と麻薬カルテルの連携がますます目立ってきており、アメリカの当局はそれに目を光らせている。

——組織犯罪に関するエルサルバドルの現状はどうなのか？ それに関して政府はどんな対策を講じているのか？

中米のいくつかの国では何らかの麻薬カルテルが国内に存在していることを認めており、たとえばグアテマラではメキシコの麻薬カルテルのひとつ、セタスが国内で活動していることを公表した。中米のほかの地域でも、カルテルが活動できるような基盤がある可能性があり、われわれはそれを否定しない。また犯罪組織の取引きに関連した犯罪もしばしばあるだろう。中米地域で講じられている対策に関しては、中米統合システムに参加する中米諸国の共同戦略が構築されている。さまざまなプロジェクトが準備されており、同時に地域内諸国の間で少なくとも情報面と共同作戦の連携が強化されてきた。

我々が実践に移るのはまだこれからだが、交

渉と情報の交換に関しては進展してきた。実践レベルでは、この関係を強化し、共同作戦を実行できるようにするための条件を整えることが必要となるだろう。また中米協力システムにおいて、コロンビア、メキシコ、アメリカ、ヨーロッパとの連携を構築することが計画されている。これらの国々は、常にわれわれの会議に参加し、政策決定にもかかわっている。ヨーロッパ諸国、アメリカ、メキシコ、コロンビアといった国々との間で、エルサルバドルは友好国グループを構成している。最善の結果を得るためにわれわれは常時関係を保っている。

——組織犯罪はどの程度の脅威となつていくのか？ その暴力のレベルは？

エルサルバドルの場合、地域内では最も小さい国なので、当局は国内のあらゆる地域に問題なく入ることができる。だが実際には秘密裏に活動し、治安を乱す組織が存在するのは事実だ。そして犯罪組織は殺人、誘拐、恐喝といった犯罪を起こしており、自分たちの取引きを脅かされまいとしている。基本的に彼らは中米地域のカルテル、地元の組織であるが、取引きを通じて他のカルテルと関係を持つようになってきている。

調査によれば、殺人事件の原因には三つがある。ひとつは組織犯罪によるもので、もうひとつがギャング団によるもの、そして割合は小さいが社会的・文化的な要因による暴力である。

——ギャング団にはどのように対処していくのか？

ギャング団やマラスに対して、国の取締りに反抗する若者グループというイメージを持つ人が多いが、今日、マラスなどのギャング団には大人も若者もおり、非常に暴力的で、犯罪組織と常に関わりを持っている。彼らは火器を所持しており、地域で犯罪組織のメンバーが行う麻薬の密輸やそのほかの違法行為の共犯者となっている。彼らは暴力を常習としているのだ。

我々はそのようなギャング団について詳細に把握している。禁止法（注12010年9月に成立した「ギャング団禁止法」）の施行によって、彼らは非合法となり、それゆえその存在は許されないことになった。さらに彼らの所有する資産や違法な目的のために使用するあらゆる資源は、国が差押えや押収をできるようにした。若者が団体を作ることは禁じていないので、法的に許される範囲内で抗議団体を作つて意思表示することは可能だ。しかしギャング団は、武器を使用し、麻薬取引を行い、麻薬の保管や密輸を行い、武装集団を抱えている。違法とされたMSや18やマオマオといったギャング団のメンバーに関してはすべて詳しいデータをつかんでいるが、ほかのタイプの若者の団体は、抗議であれ不満を訴えるものであれ、禁止はされていない。

公衆衛生上の問題

——麻薬の使用はどのような状況か？

若者の間での麻薬の使用に関する調査が行われている。危険性のある摂取物としてもっとも多いのはアルコールとタバコだが、それ以外の麻薬の使用のレベルでいうと、マリファナがもっとも多く、次いでシンナーの吸引、クラックの順である。

刑務所内で、受刑者や訪問者の登録を行う際の保安活動の一環として行われた調査もある。それによれば、もっともよく使用される麻薬はマリファナ、次いでクラック、その次がコカインという結果が出ている。

——すでに公衆衛生上の問題？

すでにそれは問題になっている。病院のいくつかが中毒患者の受け入れを行っており、リハビリを行う一五〇の組織がある。ただ問題は、施設によって役割や考え方が異なっていることである。宗教的な考え方に基づいた施設もあれば、技術的な面が中心になっている施設もある。そのためしばしばこれらのリハビリ組織のメンバーは、法的な規制を何も受けていないため、必要な条件を満たしていないことがある。そのため、全国麻薬対策協議会は米州機構とともに、リハビリ施設に対して研修を行ったり、規制を

かけたり、支援を行ったりできるように、正確な調査を行うよう動き始めたところだ。その一方で、国は政策として、ローカルレベルで地区ごとに受け入れのできるリハビリセンターを創設することを計画している。

機能不全の警察組織

——麻薬組織対策に軍が動員されているのか？

今のところ、軍は警察に協力を行っているが、国内全域においてではなく、一部の地域に限られている。

——結果はどうだったか？

軍は状況の安定化に貢献したといえるが、同時に憲法上の理由により、軍の駐留は恒常的なものとはなりえない。また組織の再編が行われているところだが、公共の安全に責任を持つのは警察である。

軍は力を尽くし、大いに貢献している。警察では四〇〇〇人の人員が不足しているが、警察が必要な人員を確保でき、組織の浄化が適切に行われれば、軍との協力のあり方を見直すことになるだろう。

——警察への麻薬組織の浸透はあるのか？

警察だけでない。捜査を指揮し、裁判所やそのほかの国の機関で立件する検察庁における

汚職の問題も扱わざるをえない状況で、税関や軍内部も同様である。われわれは犯罪組織のあらゆる企みにつねに警戒している必要がある、組織の浸透があると考えただけの根拠や疑いがないように見えていても、すべてうまくいっているなどとけっして考えてはいけない。

——近隣国やその他の国々との地域的な協力はどうなっているのか？

法的な枠組みはもう出来上がっている。政治レベルでこれまで決定されてきた事柄を実践に移すだけである。

——麻薬問題に関して地域で議論が必要では？

もちろんだ！ 中米の安全保障戦略には犯罪の抑制や制御だけが含まれるのではなく、暴力を社会的に予防し、犠牲者を救済し、制度を強化することも含まれる。そして予防と制度改革に関連して、地域的レベルで麻薬に関してより効果的な政策を議論する必要があるといえる。

(訳・山本昭代)

あなたは強い

Sinchi Kayniyki

ケチュア語、人々の言葉
こう言ってあなたを称える
あなたは石のようであると
世界の人々に伝えながら

ずっと昔から
人々の心の中に居続ける
山も、川も
簡単に乗り越える

小さい子供の声は
ケチュア語をしゃべると
その喋り声は
歌っているように聞こえる

娘たちの声は
ケチュア語では甘く聞こえる
泉が沸きだすように
言葉が飛び跳ねている

労働者、若者が
ケチュア語をしゃべると
その強さが言葉に表れ
力強さを示す

老人がしゃべると
一つ一つの言葉が
知恵と助言を与えてくれる
我々が正しく歩んでゆけるように

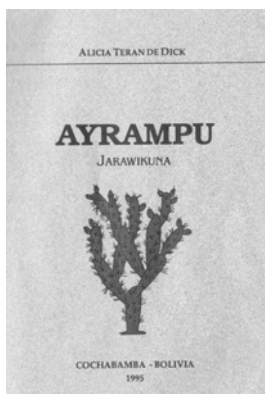
インカの法律は
ケチュア語で書かれていた

インカ帝国はあなたとともに
世界を照らしていた



あなたと一緒に歩けば
国境もない
入って来なさいと言っているように
話声は聞こえる

今日、ケチュア語は
急速に回復してきている
その居るべき場所に
自身の力で入ってきている



アリシア・テラン・デ・ディク
Alicia Terán de Dick
詩集『アイランプ』Ayrampu より
訳：栗原重太
Ayrampu（スペイン語では
Airampo）アンデス原産のサボ
テンの一種で、その実は赤紫色の
着色料の原料となり、お菓子や発
酵酒の着色に利用される。

『アイランプ』はケチュア語で書かれた
詩集で、作者のアリシア・テラン・デ・デ
ィクはボリビア人の女性です。数年前に亡
くなくなりましたが、多くの詩のほかに短編
小説や随筆などをケチュア語で執筆されま
した。また、ケチュワ語を学ぶための教科
書も何冊か執筆されています。

今回から連続で栗原茂太さんによ
るケチュア語の訳詩を紹介します。

連載第四一回 『ラ米百景』

伊高浩昭(シジャーナリスト)

第五九号

「アメリカ世界の多様性」

創造力を豊かにした

Eがアーンガカサエラアメリカを奮

キューバ革命の偉大な遺産の一つに「カサ・デ・ラス・アメリカス」がある。ハバナにある「ラス・アメリカス館」と呼ばれる古い建築物がまさに本部なのだが、「カサ」は抽象的な文化空間でもある。「ラス・アメリカス」は「米州」であるが、米州(南北両アメリカ大陸とカリブ海)を単一的に△西半球△と捉え△汎米主義(パナメリカニズム)△を全域に覆いかぶせて、△同質的な新世界アメリカ△を覇者・米国が支配するとする「モンロー教義」の覇権概念の米州とは大きく異なる。

ラス・アメリカスは、定冠詞が示すように「さまざまにアメリカ」を意味する。つ

まり米州は北米、南米、カリブ、中米(北米の一部)、インドアメリカ(先住民族系アメリカ)、アフロアメリカ、ラテンアメリカ、イスパノアメリカ、ルソアメリカ(ポルトガル系アメリカ)、ブラジル、フランコアメリカ、アングロアメリカ、オランダ系アメリカなど多種多様であり、そのことを「ラス」で表しているのだ。アングロアメリカの米国内には、イスパノアメリカやアフロアメリカが拡がっている。カリブ海には、アングロアメリカにしてアフロアメリカである英連邦諸国がある。イスパノアメリカのメキシコ、グアテマラ、エクアドール、ペルー、ボリビアでは、インドアメリカの存在が大きい、アフロアメリカは、ブラジル、アンデス北部諸国、カリブ海、米国に拡がっている。フランコアメリカは、フランス植民地である南米ギアナとカリブ海の島々、ハイチ、カナダケベック州にまたがる。

ラス・アメリカス館は、そんな米州の多様性を文化・芸術面で捉え、イデンティティ(認同)アイデンティティ)を堅固にし、創造を促進し、優れた作品を表彰する機関なのだ。革命の年一九五九年の四月二十八日に創設され、故アイデエ・サンタマリアが初代館長に就任した。アイデエは、キューバ革命の原点となった一九五三年七月二十六日のモンカタ兵営襲撃に参加した女性一人のうちの一人だ。

館は一九六〇年に文学賞を設けたが、ベネズエラのロムロ・ガジエゴス賞と並ぶラ米の重要な文学賞となっている。館はその後さまざまに芸術分野の賞を設けて今日に至るが、中心は文学賞だ。今年二〇二二年一月二十六日には、五三回目の文学賞が発表される。

× × ×

その審査の中心を占めたのは、ウルグアイ人ジャーナリスト兼作家のエドゥアルド・ガレアーノである(註1)。ガレアーノは七五年に小説『私たちの歌』で、七八年に証言・検証集『愛と戦(いくさ)の日夜』で館賞を受賞し、去年(二〇二一年)は、〇八年の

作品『エス・ペロス(鏡)』で館の物語部門のホセマリーア・アルゲダス名誉賞を受けている。ガレアーノは一月二六日の今年度審査開会式で、三月刊行予定の『日々の子たち』の一節を朗読した。一九六〇年代にグアテマラを訪れた折に出合ったマヤ文化について賞賛した内容だ。「マヤ文化は時が空間をつくる、アメリカに一つしかない先住民文化だ」と指摘した。開会の挨拶は、次のようなものだった。

キューバ革命から生まれた「カサ・デ・ラス・アメリカス」は半世紀あまり、我々が我々の目で我々自身を下から内面から見つめるのを助けてきた。我々をずっと貶めてきた上から外側からではない。アメリカと、その多様性ムーチャス・アメリカス(註2)の発見の日は、決して一四九二年一月二日ではなく、この館が創設された一九五九年四月二六日である。スペインの発見者たちは、アメリカの現実を捏造し、目も眩むばかりのアメリカの多様性と深い根源を否定した隠匿者中の隠匿者だ。この館のお蔭で我々は、隠されていた創造のエネルギーを掘り起こすことができた。

ガレアーノは、ロベルト・フェルナンデス・スリレタマル現館長、リカルド・アラルコン国会議長、アベル・プリエト文化相、アルマンド・ハルト元文化相(現ホセ・マルティ文化協会長)、故アイテエの夫、その他の審査員らの大きな拍手を浴びた。最後に、ニカラグアの革命運動「サンディニスタ民族解放戦線(FSLN)」「オルテガ現政権と党」を結成した故カルロス・フォンセカの言葉を引用して、「真の友は面と向かって批判し、肩越しに称賛する」と付け加えた。

ガレアーノにとって今回は、一九九九年以来の久々のキューバ訪問だった。一月四日、キューバの著名な歴史家エウセビオ・レアルとハバナ旧市街を散策し、「時が止まっているように感じられた。廃墟になるにまかせてきたこの地区には美しい狂気がある」と感銘を語った(註3)。ラウル・カストロ議長が手掛けてきた改革政策については記者団に、次のように述べた。「革命は一つの道を辿ってきたが、やりたいことではなく、できることをしてきた。その結果、変化が意味を持ってきた。現在

の変化は、変化する能力のある社会に溜まっていたエネルギーによって生まれつつある。変化は可能だし必要でもある。最良の変化を祈る」

今回ハバナに来てからホテルでインターネットを使おうとしたところ、「禁じられた国から国外に繋ぐことはできない」という外国の接続業者からの断り書きが入ってきたという。この事実を踏まえてガレアーノは言った。

「キューバが禁じられた国になったのは、あらゆる状況と困難をものともせず、他国の模範になるような尊厳を維持してきたからだ。またキューバが困難にめげず、国際社会と連帯してきたからだ。危険な連帯だ！だからキューバは禁じられた国になつてきた。私もキューバを愛するが故に、禁じられた者になりたい」

ガレアーノのキューバ訪問と前後する一月九日、エル・サルバドルの法廷は、同国の詩人口ケ・ダルトン(一九二五〜七五)の殺害事件を審理するか否かの聴聞会を開き、「時効を主張した検察庁の言い分を容れて、遺族の訴えを却下した。米国人の父

を持つ著名な詩人ダルトンは、ゲリラ組織「人民革命軍(ERP)」に一九七二年入ったが、二年後に組織内の革命合法化で「CIA協力者」と一方的に断罪され処刑された。遺体は依然見つかっていない。ダルトンは一九六九年に詩集『タベルナ、および他の場所たち』でフス・アメリカス館賞を受賞していた。ガレアーノの友人でもあった。「彼は彼であるが故に、屈従するような者ではなかったが故に、仲間から殺害された。新たなインプニダー(無処罰)だ。無処罰はラ米の恥だ」と批判した(註4)。

昨年二月三日カラカスで、LAC(ラ米・カリブ)の統合を理想とする「ラ米・カリブ諸国共同体(CELAC)セラック」が発足した。記者団に問われて、「ラ米連帯は、この世界で自衛するため不可欠な道だ。だが極めて複雑な道であることを理解せねばならない。ラ米も世界の不平等を映す鏡である」という事実を無視せずに、統合を求めたい」と述べた。そのうえで、「北は悪く南は善い」と捉えてはならない。いずれも矛盾に充ちている。この事実からわかれなければ、異なる者同士統合は生まれ

れない。南銀行創設などの試みは大事な発想だ。だがジンテーゼ(総合・統合)へ昇華するために、矛盾を恐れてはならない。我々は矛盾し合い異なっているから、生きているのだ。異なる者同士の統合は複雑だと強調した。ガレアーノは、異なる者同士の「正」と「反」の矛盾の衝突から「総合でない統合」が生まれる弁証法を踏まえてラ米統合も「ジンテーゼ」だと観ているのだ。

さらに、「多様性を認識し、多極的世界を祝福することから、我々の持つ創造と変化の無限の可能性を認識することができると前置きし、「それでなければ、飢餓が屈辱から死ぬべき者は誰かと選別されて、体制の命じるままに従わなければならなくなる。我々は、死にたくない、と心えなければならぬ」と強調した。フォンセラの言葉を引用した伏線は、この辺りにあったようだ。この最後の言葉は、米州で多様性を主張しながら国内では多様性の主張に対して厳しいキューバ指導部、また、民間に下放すべき国家公務員を選別している同指導部にとって厳しい批判となった。

註1：日本では、二〇二二年二月に出た『火の記憶3 風の世紀』(飯島みどり訳、みすず書房)が刊行された最新号の書。

註2：日本人の多くは、「アメリカ」を「アメリカ合州国」(USAMERICAWUSA)と信じて疑わない。ここに戦後日本の最大の過ちと停滞の理由がある。日本人が「ラス・アメリカススムーチャス・アメリカス」の思想を体得すれば、歴史を前進させることができるだろう。ラ米は、とつくの昔に思想的には「USAの覇権憧」を超えてしまっている。

註3：ハバナ市街地で一月十七日、三階建ての古い住宅一棟が崩落し四人が死し、五人が負傷した。数年前から「居住不適格住宅」に指定されていたという。この崩落事故の日、ガレアーノらはシエンフエゴス市に移動し、文芸賞候補作品の審査に入った。註4：ダルトンの遺族が訴えていた相手は、ロケを裁いた当時のERPのボアキン・ビジャロボスとホルヘ・メレンデスの最要幹部一人だった。ビジャロボスは二〇一〇年からカルテロン現メキシコ政権の麻薬取締政策の顧問であり、メレンデスはエル・サルバドルのフネス現FMLN政権の弱者救済問題の責任者となっている。ERPは、ゲリラ連合「フアラフンド・マルチ民族解放戦線(FMLN)」に参加していた。FMLNが政権党となったため、旧ゲリラ幹部も登用されている。

月刊「LATINA」2月号に、伊高執筆の「ハ血塗られた将軍」の極右政権発足 和平公意15周年「グアテマラの逆流」という特集記事が掲載されています。伊高の「現代メソアメリカ情勢」ブログは <http://vagress-salvador.blogspot.com/> です。

音楽三昧♪ペルーな日々(第44回) バリオの時代からスターの時代へ フェリペ・ピングロとヘスス・バスケスによせて

ペルーの海岸地方の民衆音楽であるクリオーヤ音楽は、フィエスタの音楽として愛される踊りの音楽だ。時代時代に即した音楽を柔軟に取り入れ、また独自に発展させながら常に人々の心に寄り添う音楽として愛されてきた。夜を徹して歌い、踊り、呑み、冗談で笑い、語り合うフィエスタの情景は、今なお変わることなく続いている。十九世紀にはマリネラ(サマクエカ、チレナと呼ばれていた)がフィエスタの花形だったが、十九世紀後半より徐々にバルスやポルカといった新しいヨーロッパから入ってきた音楽がラテンアメリカ全土で流行し始め、御多分にもれず、ペルーのバリオでもバルスやポルカが人気の踊りとなっていた。

とも次第に減っていった。ペルーでも、二十世紀初頭まで流行したバルスではあったが、それ

しかしバルスやポルカの人気も二十世紀初頭には次第に減速し、多くの国では土着の音楽と融合が進み、バルス自体が演奏されるこ

以降はタンゴやマズルカ、フォックストロットといった新しい音楽にお株を奪われつつあった。

二十世紀初頭、庶民の生活の場であるリマのバリオ(下町の街区)では、カジェホンと呼ばれる中庭を持った集合住宅に住む者が多かった。そこではお互いの生活が筒抜けで、時に水場も共有で井戸端会議の最前線だったりする長屋的な生活が繰り返られていた。こうしたカジェホンがクリオーヤ音楽の育まれた現場だった。当時、それぞれのバリオは今より閉鎖的で結束が強かった。それ故互いにライバル意識を持って張り合うことも少なくなかった。フィエスタで皆が楽しみにしている音楽も、それぞれ自分のバリオの音楽家たちによって演奏されており、バリオごとにレパートリーも演奏のスタイルも少しずつ違っていた。そんな閉じられた

バリオでは、堅気の仕事をしながらフィエスタがあると演奏に打ち興じる音楽親父たちが人気者で、中には代々一族がみんな音楽家なんて家系も少なくなかった。

レコードやラジオ放送が一般化する前の民衆音楽家たちの多くは、小さなバリオ社会のヒーローだった。そしてそんな時代に生まれながら、バリオの枠を超えて愛された偉大な音楽家が、フェリペ・ピングロ・アルバだ。リマの中でも特に音楽が盛んだったバリオス・アルトスに生まれた彼は、多数の名曲を残した作曲家で、タンゴ、マズルカ、ワンステップ、フォックストロットなど非常に多くの曲を書いたが、特に数多くのバルスの傑作を作り、バルスをクリオーヤ音楽の中心的な音楽にまで押し上げる一端を担った。彼は民衆目線で多くの名曲を作ったが、中でも身分の違う叶わぬ恋を歌ったバルス「ルイス・エンリケ、エル・プレベジヨ(庶民)」は、今なおクリオーヤ音楽を代表する名曲として愛され続けている。ペルーにおける彼の存在は、メキシコにおけるアグスティン・ララやプエルト・リコにおけるラファエル・エルナンデスに相当すると言われる。

しかしピングロは、演奏と作曲に素晴らしい才能を持ちながら一九三六年に早逝した。死後、彼の死を偲んだ友人音楽家たちは、ピングロの遺した素晴らしい音楽を守り伝えていこうとフェリペ・ピングロ文化センターを設立した。そしてその二年後、その文化センター主催のピングロ追悼コンサートで、綺羅星のごとく登場



したのが当時十八歳だったうら若き女性歌手ヘスス・バスケスⅡ写真左Ⅱだった。

ペルーの首都リマの旧市街の中心であるバリオ・セルカードに生まれたヘスス・バスケスは、十八歳の時、友人でその後歌手として大成するエステル・



グラナードスと共に、ラジオに出演するなど歌手としての活動を少しずつ始めた。ところがその年のうちに、

彼女の一生を方向付ける大きな転機が訪れた。それが先ほど述べた追悼コンサートだった。そのコンサートで、彼女はピングロの代表曲「エル・プレベジョ」を3度も乞われて歌うほど非常に高い評価を得た。文化センターの長でありピングロの友人でもあった「ポルカ王」ペドロ・エスピネルは、その歌声の素晴らしさに惚れ込み、当時制作していた映画の中でも彼女に「エル・プレベジョ」を歌わせた。その映画は大きな反響を呼び、彼女はその後多くのラジオで活躍するようになった。

さらに翌年、彼女は雑誌「リマの豎琴」主催の「伝統の歌声」コンテストで、再びピングロの「エル・プレベジョ」を歌って「クリオーヤ歌謡の女王」に選ばれた。この優勝は彼女の名声を決定づけ、それ以来彼女は敬愛の情を込め

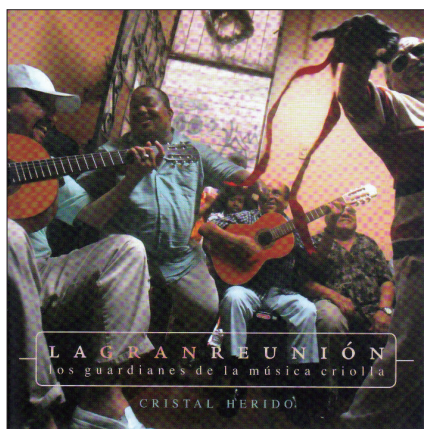
て「クリオーヤ歌謡の女王」の名で呼ばれるようになったのだった。

このようにまさに「エル・プレベジョ」を歌って愛される歌手へと成長したヘスス・バスケスは、同時にそれによってピングロの再評価にも大きな役割を果たした。クリオーヤ音楽はバルスを中心とした音楽へと転身し、同時にバリオ音楽の人気者という枠を飛び出して多くのラジオ・スターが登場し始めた。その後も彼女の活躍は目覚しく、四十五年にはボリビア、アルゼンチンで海外公演を行い、プエノスアイレスではオデオン・レコードで最初の録音を行った。また中南米諸国に加え、アメリカ合衆国やヨーロッパ諸国でも公演活動を続けた。数多くの名曲を録音し、人々の前で歌い続けた彼女は、国内外で高い評価を得、いつしか本当にクリオーヤ音楽最高の歌姫へとなっていた。クリオー

ヤ音楽はバリオの音楽から多くのスターが輝く大衆音楽へと脱皮し、数多くのレコードが録音され、踊られた。そうしてクリオーヤ音楽の人氣が高まり、その音楽を聴く人は増えたが、バリオで生き続けたフイエスタのためにだけ演奏されるクリオーヤ音楽の存在は忘れられていった。

それが最近になって、こうしたバリオのクリオーヤ音楽復興プロジェクトがにわかに注目を浴びることとなった。その大きな仕掛け人となったのが、サヤリイ・プロダクションのフェルナンド・ウルキアガ氏であり、彼が企画した二つのプロジェクト、「デ・ファミリア」と「ラ・グラン・レウニオン」Ⅱ写真上Ⅱである。第三十八回でも触れたが、バリオで受け継がれる音楽一家の名演を集めた企画と、バリオの長老たちの熱演オムニバスの企画は、ペルー内外で高い評価を受けた。日本でも「ラ・グラン・レウニオン」が、ミュージックマガジンの二〇一一年ラテン音楽部門で第一位を獲得するなど、まさに今、ペルー音楽に少しずつ風が吹き始めている予感がちよこつとするかもしれないのである。

(水口 良樹)



ひき肉のトスターダ

TOSTADAS CON CARNE MOLIDAES SECOS



●材料（4人分）

- ・牛肉のひき肉 300 グラム ・レタス 8分の1
- ・揚げたトウモロコシのトルティーヤ 4枚 (OLD EL PASOのTaco Shellはデパートや大きなスーパーで入手可)
- ・OLD EL PASOの「Taco Seasoning」チリパウダー 1パック (35 グラム) LAWRY´Sというメーカーの「CHILLI Spices & Seasonings」 1パック (42 グラム) でも可。これらがなければ、チリパウダー（あまり辛いもの）と粉末クミン、粉末ニンニク、粉末オレガノ、粉末パプリカ、粉末タマネギ、ココアパウダーを計50グラムになるまで少しずつ混ぜてつくってもよい。
- ・トマト 大1個か中2個 ・タマネギ小 1/4
- ・ピザ用のチーズ 50 グラム
- ・薄切りハラペーニョ（なければ、タバスコという名のハラペーニョソース）（辛いものが苦手な人は、ハラペーニョなしでもよい。苦手な客がいる場合は、別の皿にわけておいたほうがよいかも）
- ・熟したアボガド 1個 ・水 1/4カップ

●作り方

- 1) トマトとタマネギを細かく刻む
- 2) アボガドの皮をむき種子を取り除き、2センチ角の賽の目状に切る
- 3) レタスを洗って4、5センチの長さに細切りにする。
- 4) 肉、刻んだタマネギとトマト、チリパウダー1/2パックをフライパンに入れる
- 5) おたまでかきまぜながら弱火で炒める。4、5分後、水を加え、肉とトマトとタマネギがよく火が通り、水分がすべて飛ぶまで炒める。
- 6) トースターで、トスターダを2分程度あたためる。油分を含んでいるため焦げないように気をつける。
- 7) 皿の上にもまずトスターダをおき、炒めた肉、細切りのレタス、さいの目状に切ったアボガド、チーズをのせ、最後に薄切りのハラペーニョ（あるいはタバスコソース）をのせる。

一〇一二年の最初は、おいしくて調理が簡単で、来客の際に便利な料理を紹介します。ご家族もお客さんも喜んでくれるでしょう。

トウモロコシのトルティーヤは、数千年前からメキシコの食べ物の基本であり、スープやグラタン、コーンチップ、タコスなどと食べ方も多彩で、チーズと揚げたりコメと組み合わせたりと、多くの食材と組み合わせることが出来ます。

オルメカやアステカ、マヤ、サポテカといった古代文明でもトウモロコシは利用されました。紀元前一五〇〇年に現在のタバスコ州やベラクルス州に栄えたオルメカ文

明は、トウモロコシとともに、地域原産のタバスコという種類のトウガラシや、ハラパ原産のハラペーニョも栽培していました。ちなみに一九二〇年にベラクルス州の州都となったハラパ (Xalapa) は、かつてはXalapaと記されていました。「Mexico」という名と同様、昔はXは「と同じ音だったためです。だから今でも都市名や人名にXimenesやXavierとついた名が残っているのです。

torillaとつう名は、小さなトルタ (torta) や、薄いトルタを意味します。スペイン料理のトルティーヤ (ジャガイモ入りオムレット) は、米大陸のジャガイ

モがヨーロッパにもたらされた後に、イベリア半島で食べられるようになりまし。だがメキシコでははるか昔から「トルティーヤ」があり、今でも一億人のメキシコ人の基本的な食料です

メキシコに住んでいたころ、私たち兄弟の誕生日に母はしばしばひき肉のトスターダをつくってくれました。友人の家のパーティーでも食卓に並びました。料理がとても簡単だからです。

ミゲル・アクーニャ 中・高校の英語教師をしたあと、1986年に来日。「FM COCORO」でDJをつとめた。大阪の下町・天満で「メリダスペイン語教室」(http://www.merida-mex.com) を主宰。

ラテンアメリカ・カリブ諸国共同体 (CELAC) 発足

2011年12月2日と3日、ベネズエラのカラカスで33ヶ国が参加しラテンアメリカ・カリブ諸国共同体 (CELAC) の首脳会議が開かれた。その前年の2月に、メキシコ・カンクンでのラテンアメリカ・カリブ地域の会議でCELACが発足していた。この新しい共同体は総面積2050万平方^キ、人口5億9千万人を擁し、総生産は7兆円が見込まれている。

CELACはコンタドーラグループ (コロンビア、メキシコ、パナマ、ベネズエラ) やコンタドーラ支援グループ (南米4ヶ国) から別れて、エルサルバドルやグアテマラ、ニカラグアの軍事紛争に対し平和を推進する目的で1990年に作られたリオ・グループから発展してできたものである。会議の開催国であるベネズエラのチャベス大統領は、ここから我々は団結し、自立発展する礎を置くと述べた。採択されたカラカス宣言では政治、経済、社会文化の統合機構を推進すると同時に各国が平和を構築し、政治経済システムは加盟国の自由であることが謳われている。国際法を順守し、問題の平和的解決、軍事活動や示威行為の禁止、各国の主権とその領土を尊重する、人権と民主主義を尊重することなどがうたわれている。新しく議長となったチリのピニューラ大統領はCELACの活動を強調し、左派や右派の対立は過去のものであり、共同体で諸問題に立ち向かうことが重要であると述べた。今回の首脳会議では2012年の行動計画も採択され、これには経済危機への対処や統合のメカニズムについて、饑餓や貧困の根絶、環境問題、移民の保護などに対する具体的な方策を提案している。

CELACの参加国は米州機構 (OAS) の参加国と同じだが、米国とカナダが入っていない。これまでOASは地域での問題解決に米国が強い影響力を行使してきた。とりわけ、2009年のホンジュラスでクーデターが起こったときに、OASはクーデター政権を認めない決議をしたが、米国の圧力でそれ以上のアクションがとれなかったことから、その影響を受けない代替機構を作ることになったもの。(noticiasaliadas.org 2011/12/07、Center for Economic and Policy Research December 22, 2011より)

ホンジュラス — 世界一の殺人率

2009年の軍事クーデター以来人権状況・治安が悪化しているホンジュラス (人口760万人) で、2011年人口10万人当たりの殺人件数が86件と世界一となった。世界平均は人口10万人当たり8.8件。とりわけ、現在のポルフィリオ・ロボ大統領就任以降その数が増えている。就任から2011年末までの17ヶ月でみると9500人が殺されている。人権活動家やジャーナリストが多く殺されている。武器を持たない学生2人が警官に射殺れる (うち一人はクーデターの調査をした真相究明委員会委員の息子) という事件の後、米国の議会が動き出し、ホンジュラスに対する米国の支援 (年間7千万ドル) の見直しを申し入れ、さらにそのうち軍と警察に当てられている1千8百万ドルの20%を凍結するよう決定した。

(La Tribuna 4 enero, 2012, Los Angeles Times January 2, 2012より)

ニュースクリップ 2012年1月

ブラジル — 洪水で史上最悪の大被害

ブラジルで1月12日からの豪雨による洪水の被害が拡大している。被害の中心はリオ・デ・ジャネイロに隣接するセハーナ地方で、これまでに死者800人、行方不明者が400人以上出ている。死者の三分の一は子ども。救助隊がずっと活動し行方不明者の探索を行なっているが、交通が遮断されヘリコプターでなければ行けない場所も多く、被害は更に広がるだろうと予想されている。9,000人以上の人々が家を失ない、11,000人が避難生活を余儀なくされている。また洪水で汚染された水を飲むことで起こる病気や、破傷風などが増えると懸念されている。当局によると、洪水の被害を受ける可能性がある地域に住む人々は500万人にのぼるといふ。

(BBCMundo.com Jueves, 19 de enero de 2012 より)

メキシコ — 続く干ばつ、先住民族に深刻な被害

メキシコでは昨年干ばつが続いている。これまでにメキシコ国土の70%、19の州に被害が出ており、過去70年で最悪だといふ。特に被害が著しいのがバハカリフォルニア、コアウイラ、ドゥランゴ、チワワ、アグアスカリエンテス、ヌエボレオン、グアナフアト、サカテカス、ケレタロなど北部と中央高原の州だ。北部では百万ヘクタールの農地が干上がり、5万頭の牛が死んだ。チワワ州の山岳地帯に住むララムリ（タラウマラ）先住民族は飢餓に瀕している。国中で干ばつのため食糧事情が悪化、食料をさらに輸入しなければならないためトルティージャ、トウモロコシなどの値段も上がっている。この干ばつはすくなくとも今後3年は続くといふと予想されており、有効な対策が必要。

(La Jornada 20 de noviembre de 2011, NoticiasAliadas.org 19/01/2012, BBCMundo.com 17 de enero de 2012 より)

コロンビア — コカの次は金？

コロンビア北東部アンティオキア県カウカ県で金の採掘がブームになっている。この地域は少し前までコカ栽培が盛んだったが、政府によってコカ栽培が破壊された。金の値段が上昇したこともあり、金の採掘ブームが起これ、コカ栽培に従事していた人々が金鉱に移った。

金の価格は過去11年上昇し続けており、2011年は前年に比べて20%も値上がりしている。そのために老朽化して操業が停止されていた金鉱が再開されたり、新たな金鉱が開発されたり、規制がないままあちこちで操業されている。同様に、FARCなどコカ栽培を資金源にしていたゲリラや武装グループなどが、新たな資金源を求めて金の違法採掘に手を出している。

違法採掘による環境破壊も懸念されている。金脈を探して森林を伐採したり、金を精製するために水銀を使用することで引き起こされる水質汚染などの環境破壊も起これている。国連によれば、コロンビアは水銀による汚染で世界一となっている。コロンビア政府は違法採掘の取り締まりを始めているが、ゲリラや組織犯罪が関わる採掘と小規模で伝統的な採掘をしてきた人々を区別し、後者に対しては環境を破壊せず、労働基準を守ればこれを支援するとしている。だが、政府による規制や取り締まりは、これら小規模で伝統的な採掘をしてきた人々を追い出し、外国企業を誘致して大規模採掘を行う目的だと指摘する声もある。(BBCMundo.com 19 de enero de 2012 より)

3・11 東日本大震災で被災した視覚障害者を支援するため東京や関西からも関係者が現地入りしたところ、被災以前にそもそも、都市部では当たり前になりつつある基本的な福祉サービスに（その存在も知らず、あるいは知らされず）アクセスできていない人々を見出すことになった、という。今でもそのようなことがあるのかと驚きつつ、地域格差に対する自分の無意識を自覚させられる想いでした。考えてみると、グアテマラ、中南米に対する日本からの関心も、自然災害や武力紛争などニュース性の高い出来事から入り、より日常的な問題（なかには私たちも無関係ではないような）に気づいていく、ということがあると思います。その意味では、普段から関心を持ち続けていかなければならないし、『そんりさ』のような場も大切にしていきたいとあらためて思います。
(杉本唯史)

次回の「そんりさ」発送作業は 月 日（土）の予定です。
参加いただける方は連絡ください。

メーリングリストのご案内： 会員・購読者は無料で参加できます。
E-mail: recom@jca.apc.org までアドレスを連絡ください

ホームページのご案内 レコムホームページがどんどんリニューアル！
<http://www.jca.apc.org/recom/>

- | | | | |
|---------|-----------------|---------|-----------------|
| Vol.134 | グアテマラ・ニカラグア報告 | Vol.130 | 中米に広がるナルコ |
| Vol.133 | グアテマラ総選挙 | Vol.129 | コロンビア政治状況の変化と行方 |
| Vol.132 | ボリビア・ガソリン危機 | Vol.128 | ペルー・バグア事件とその後 |
| Vol.131 | エクアドル・アマゾンの石油開発 | Vol.127 | コロンビア先住民族少年マウロ |

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。
入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。
レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円（学生 5000 円）…会の運営、総会での投票、『そんりさ』、資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円（一口）…資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004

京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556（留守電）

お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは
留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

32万113円

<グアテマラ基金>

75万8530円

(2012年1月現在)